

神秘学ポエジー 風遊戯  
photopos  
129

【神秘学ポエジー～風遊戯 第 258集】 photo ヴァージョン

photopos 3201-3225

《2023.6.14～ 2023.7.8》

神秘学遊戯団

心にも  
視力がある

心で  
見えないものは  
見えていても  
見えることはないから

心で  
見るとき  
はじめて  
光の窓はひらかれる

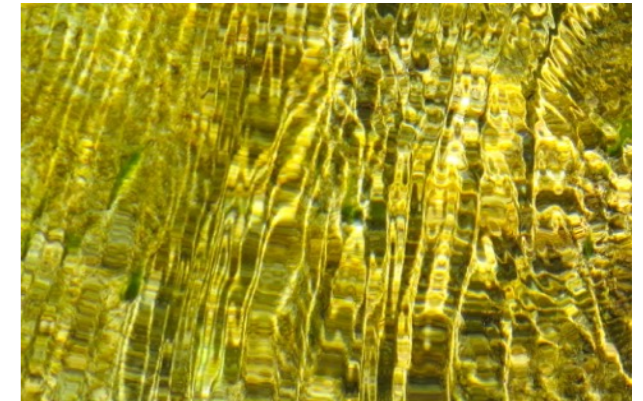
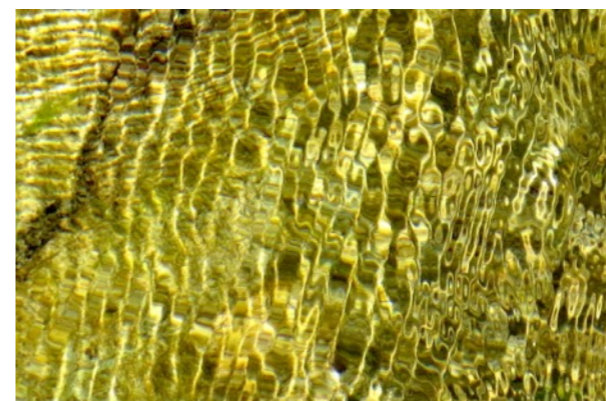
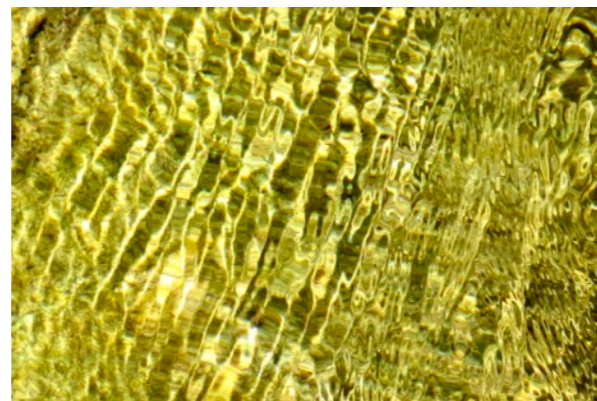
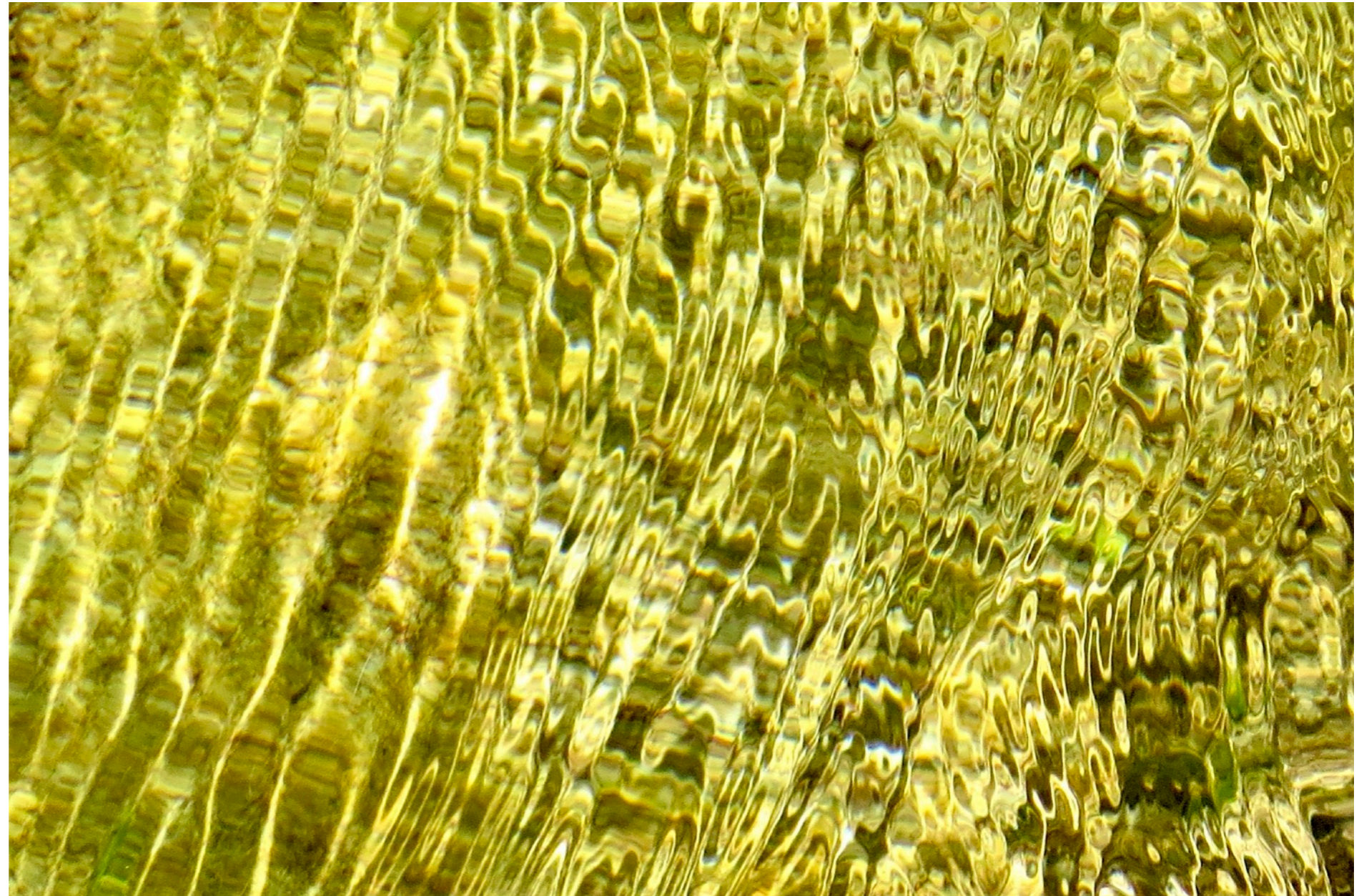
心にも  
言葉がある

心が  
言葉になれないとき  
思いは  
かたちになれないでいるから

心が  
言葉になるとき  
それは  
はじめて歌になる

沈黙もまた  
歌である

言葉は  
言葉を超えて  
光になる



※愛媛県久万高原町・面河溪にて

知ろうとしないとき  
教えられたことを  
ただ信じるとき  
ひとは安らいでられる

知ろうとするとき  
教えられたことを  
確かめないではいけないとき  
知らないという不安で  
心は乱れはじめる

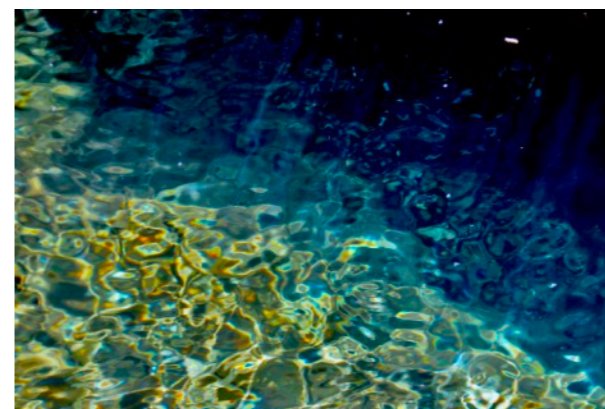
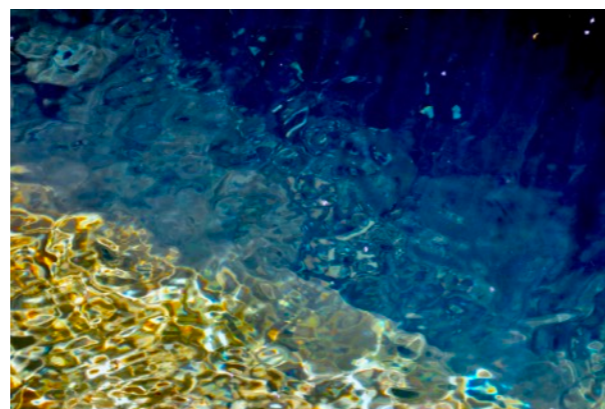
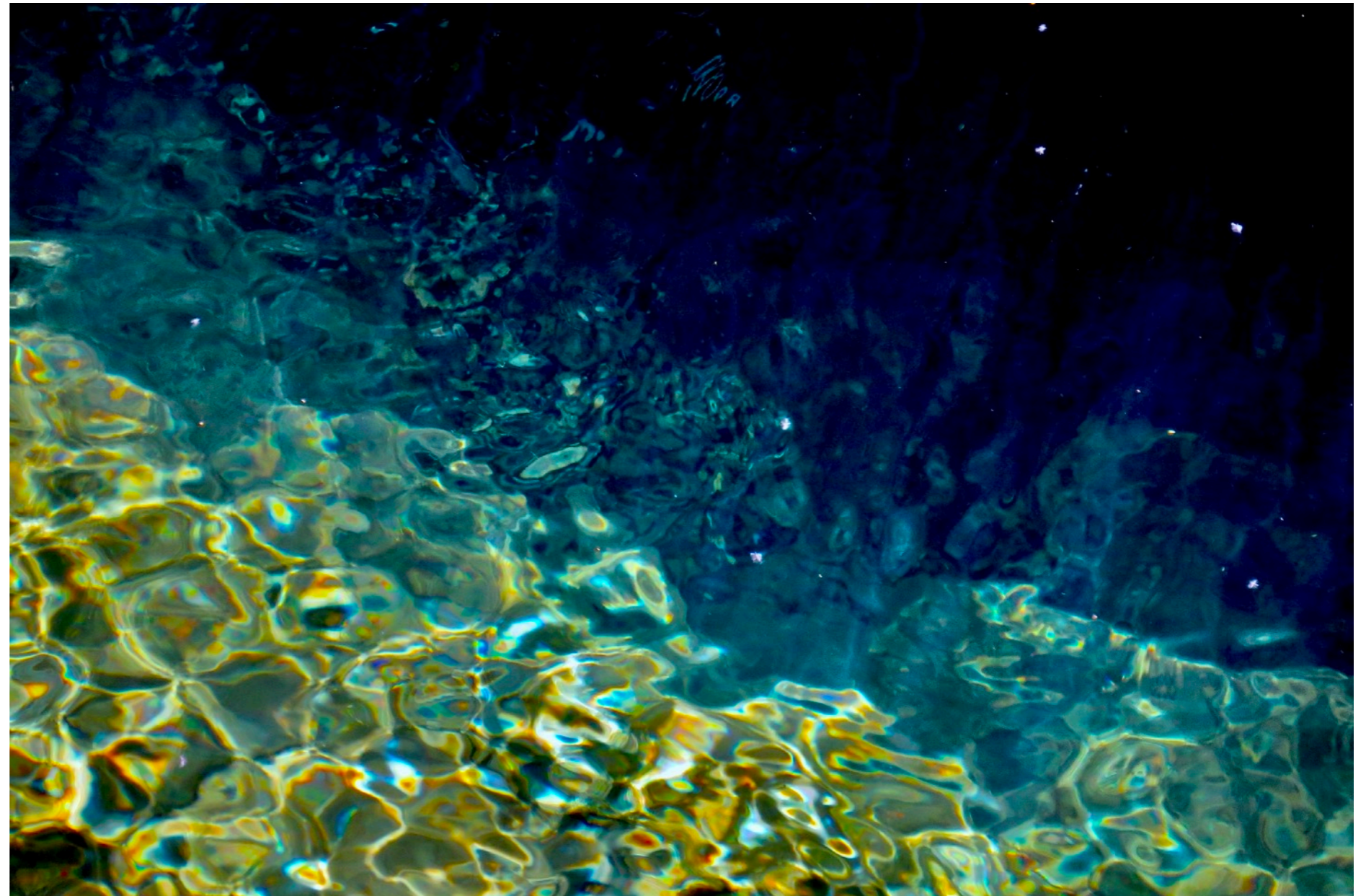
知ることは  
闇のなかで  
火を灯すようだ

知ることは  
知らないことを  
知らされる力であるように

闇は  
永遠の謎のように  
世界を覆ってゆく

そして  
闇の迷宮の中で  
冒険へと導かれる

小さな火を灯し  
そこに見えてくる世界に  
驚きつづけながら



※愛媛県久万高原町・面河溪にて

わからない  
まま

わからない  
と向きあい

わからない  
が問いになるまで

わからない  
を開いてゆく

なにが  
わからないのか

どこが  
わからないのか

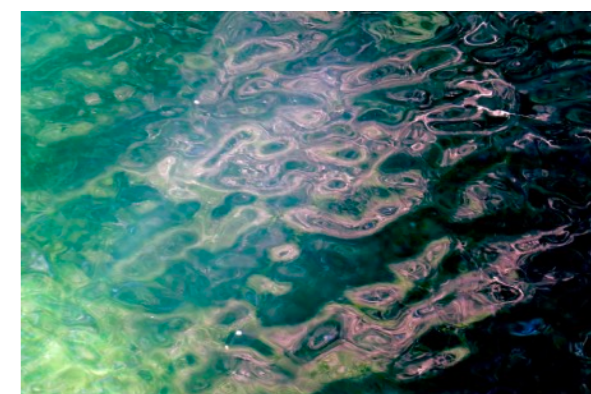
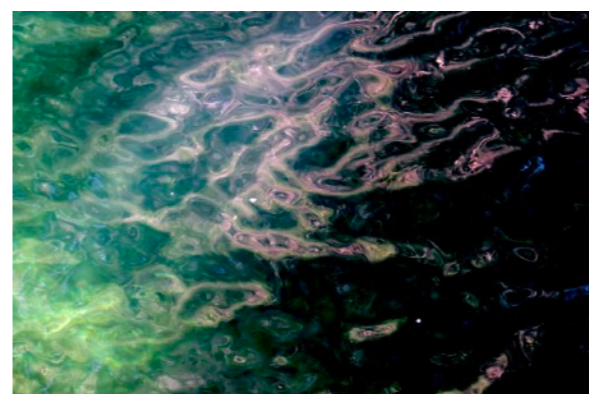
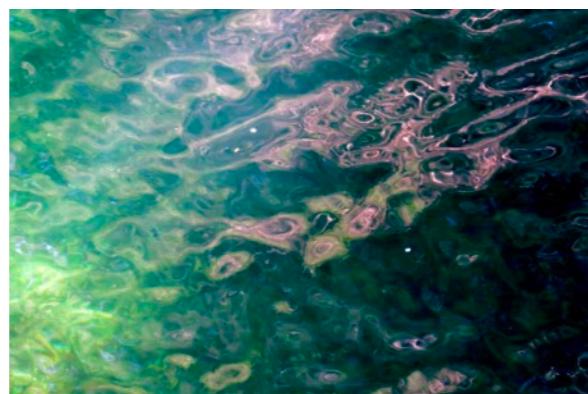
どのように  
わからないのか

問い  
を見つけ

問い  
を繰り返えし

問い  
を深め

問い  
を生きる



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

天と地を  
めぐる  
水のように

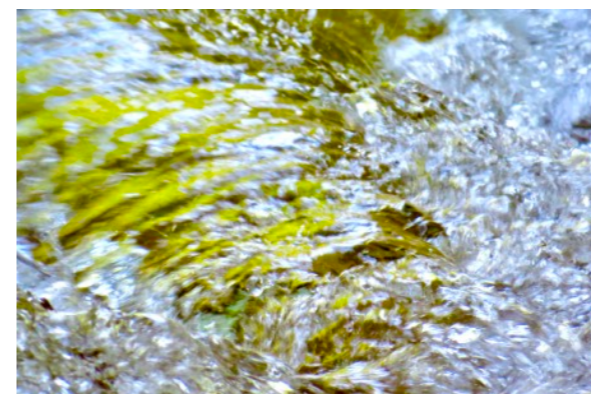
目覚めては  
眠り  
目覚めては  
眠り

生まれては  
死に  
生まれては  
死に

めぐり  
めぐりて  
めぐりのなかで

カオスは  
コスモスとなり  
またカオスとなり  
コスモスは  
カオスとなり  
またコスモスとなり

はてしなき  
めぐりのなかで  
しばし夢み  
そして歌う  
われらは  
永遠の旅人



※愛媛県久万高原町・面河溪にて

ひとは自然に  
帰ることはできない

自然というとき  
すでに自然は  
ひととの  
関係性のなかにある

自ずから  
然るときも  
すでにそれは  
自ず  
にほかならない

自然のなかのひとと  
ひとのなかの自然が  
やがてはむすばれますように

ひとは子どもに  
帰ることはできない

子どもというとき  
すでに子どもは  
子どもではない  
関係性のなかにある

子どものように  
なろうとするときも  
すでにそれは  
のように  
にほかならない

子どものなかの大人と  
大人のなかの子どもが  
やがてはむすばれますように



※高知県津野町・四国カルストにて

与えるものが  
与えられ  
奪うものが  
奪われる

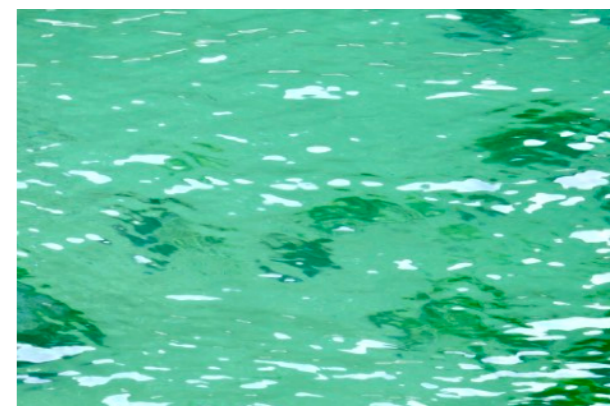
それが  
わからなくなると  
得るために  
奪うしかない世界が現れる

生かすものが  
生かされ  
殺すものが  
殺される

それが  
わからなくなると  
生きるために  
殺すしかない世界が現れる

赦すものが  
赦され  
罰するものが  
罰せられる

それが  
わからなくなると  
救われるために  
罰するしかない世界が現れる



※愛媛県松山市北条・波妻の鼻にて

☆photopos-3207 2023.6.20

わたしという物語は

生まれてきてから  
いままでに

見てきたもの  
聞いてきたもの  
嗅いできたもの  
味わってきたもの  
ふれてきたもの  
そして  
思ってきたことで  
綴られている

わたしは  
なにを愛し  
なにを憎み  
なにを記憶し  
なにを忘れてきたのか

わたしの知らないでいる  
もうひとりのわたしがいて

わたしの記してきた  
歴史を紐解きながら

見れなかったもの  
聞けなかったもの  
嗅げなかったもの  
味わえなかったもの  
そして  
思えなかったことを

その余白に  
数えきれないほど  
書き込んでいるけれど  
わたしはそれを  
読むことができないでいる……



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて



後悔のない  
生はない

なにかをする  
ということは  
それ以外のなにかを  
しないでいるということだ

ひとは  
なにかをするとき  
多次元世界の  
ひとつの世界にいる

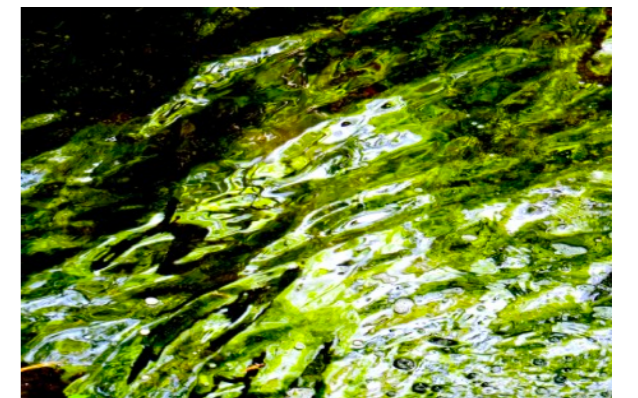
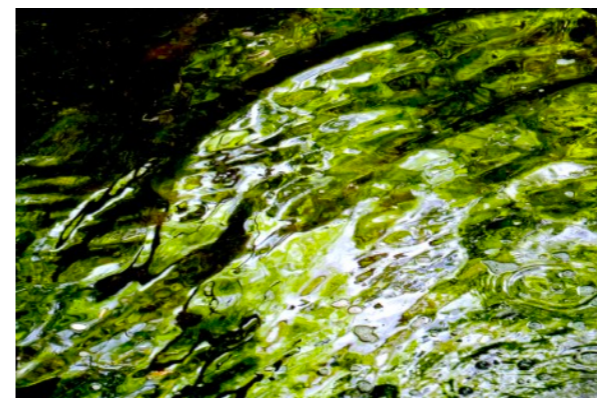
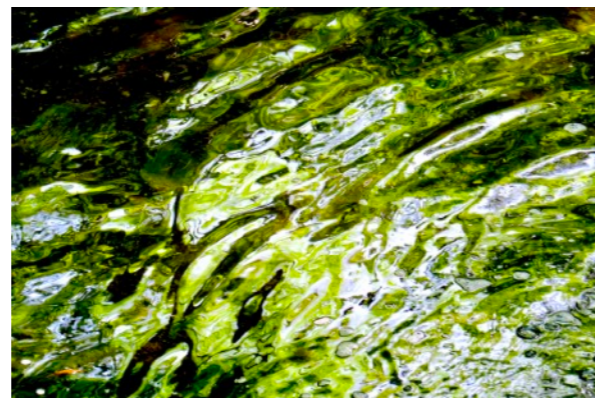
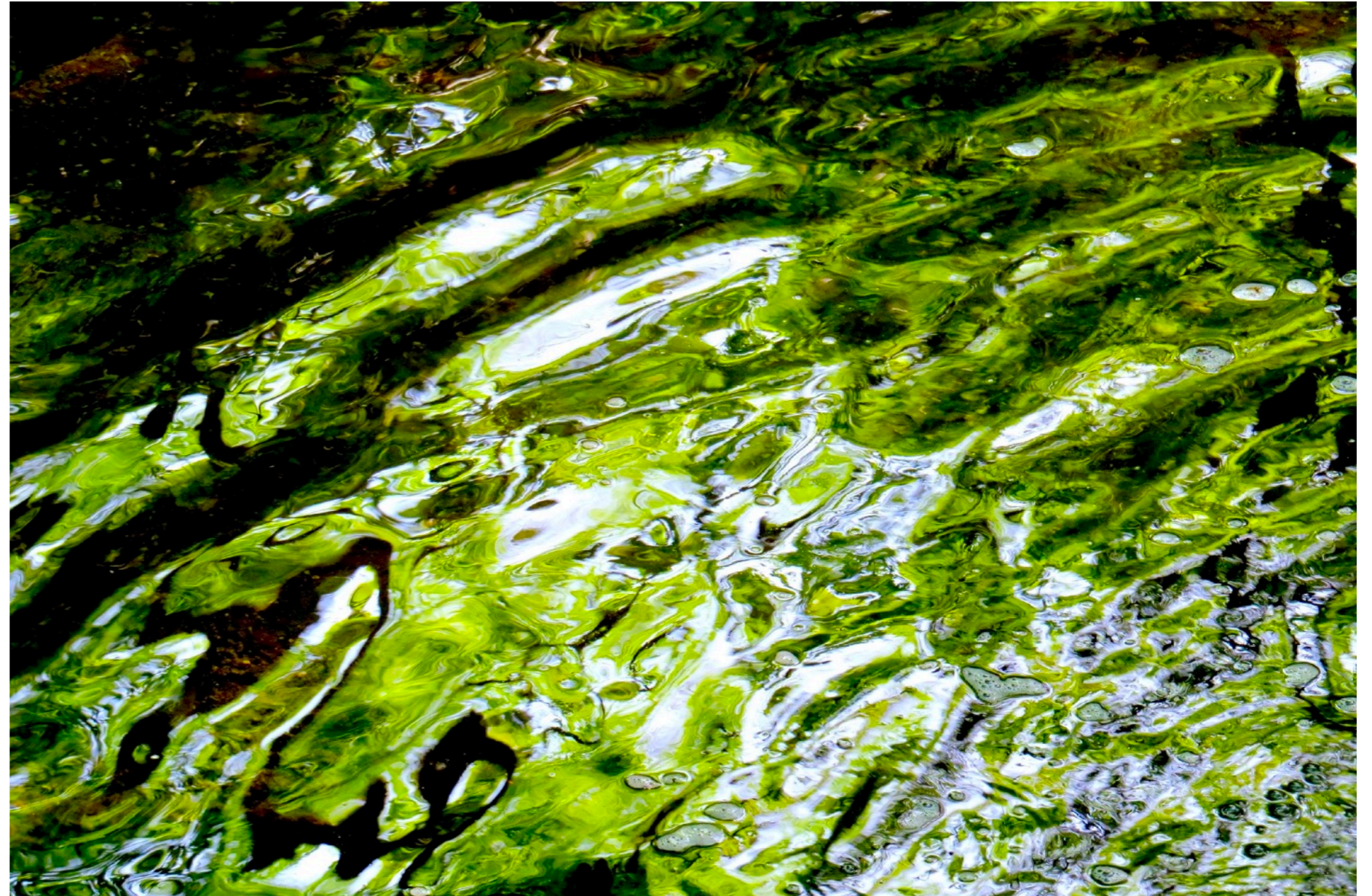
ひとつを選ぶとき  
ほかのすべては選べない

賭けるということは  
代価を払い  
敗北を繰り返すことだ  
勝ち続けることはあり得ない

賭けなければ  
選ばなければ  
敗けることはないが  
負けなければ  
得られないものがある

わたしはなにを選び  
なにを選ばなかったのか

後悔からしか  
はじまらない  
生の秘儀がある



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

欲望は激しく悲しい

いつのまにか  
発生し勢力を増す  
台風のように  
なにかを求め彷徨い

決壊した堤防から  
溢れだすように  
わたしを決壊させ  
なすすべをなくさせてしまう

欲望は仮面のような

求めるているのは  
わたしのなか  
それとも  
わたしの貌をした  
異形の者なのか

欲するものを  
得られたとき  
それはどのように  
姿を変えてゆくのか

欲するものが  
決して得られないとき  
それはどのように  
姿を変えてゆくのか

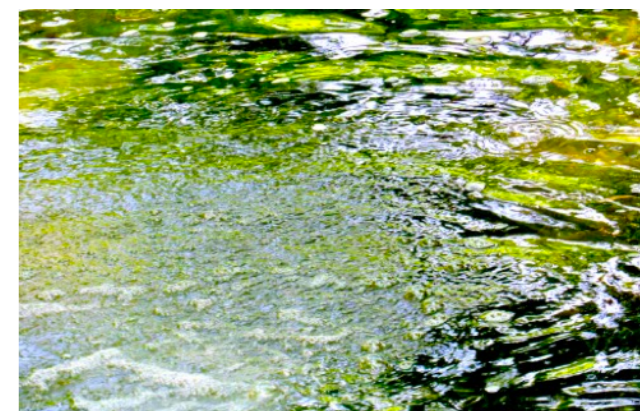
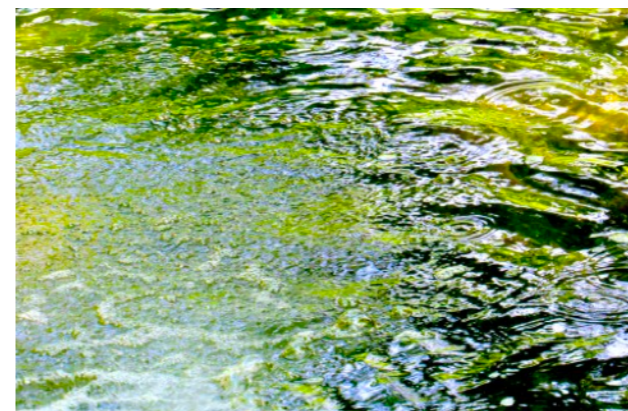
欲するものが  
わからなくなるとき  
それはどのように  
姿を変えてゆくのか

欲望を問うとき  
それは悲しみになってゆく

欲望はどこからやってくるのか  
欲望とはなんなのか  
なぜ欲するのか

悲しみの果てるとき  
それはどんな貌をもつだろう

安らぎに変わるだろうか  
それとも軛を離れ  
飛翔する翼となるだろうか



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

うたの歴史は  
ひとの歴史

うたうことで  
ひとは愛し（憎み）

うたうことで  
ひとは嘆き（歓び）

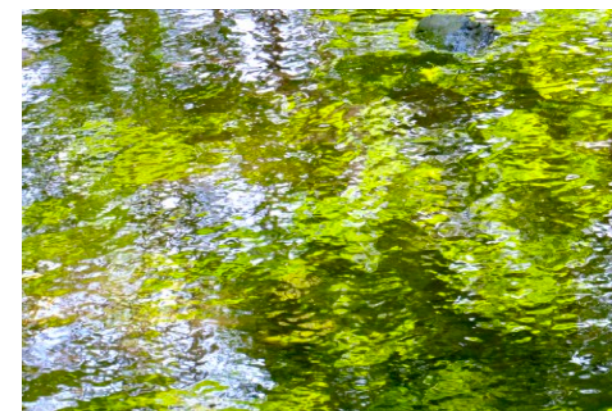
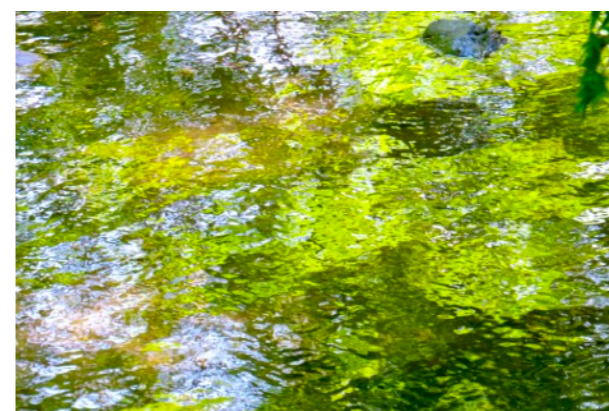
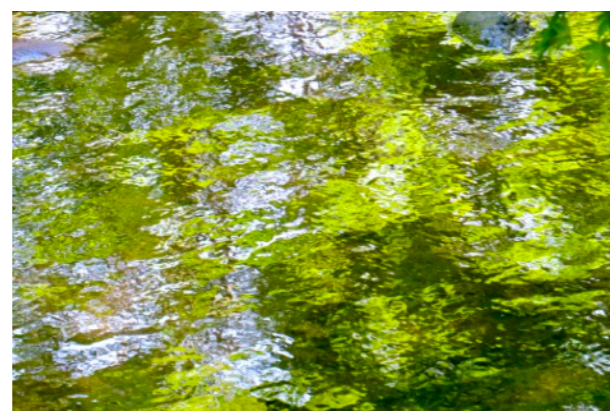
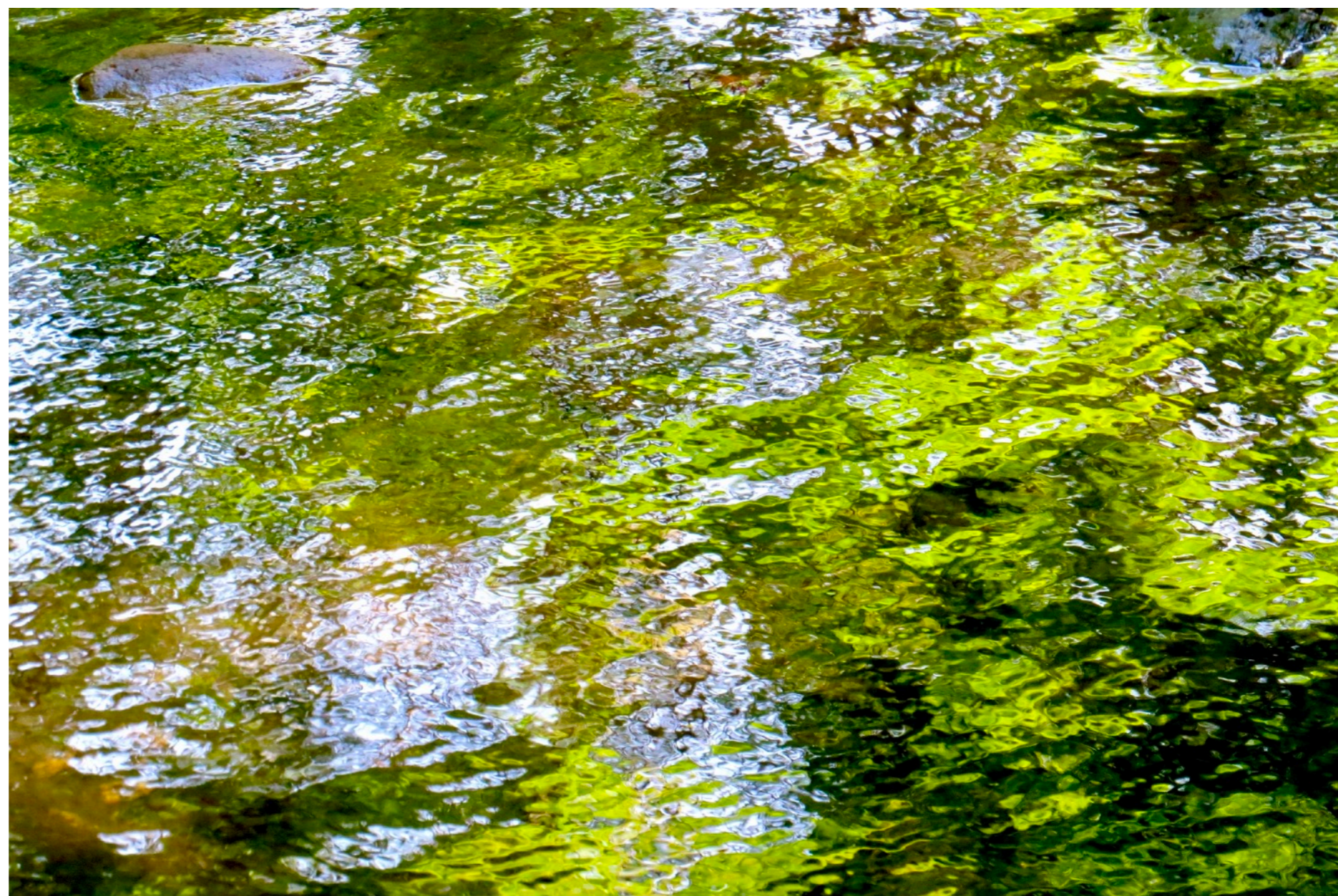
うたうことで  
ひとは怒り（赦し）

うたうことで  
ひとは訴え（涙し）

うたうことで  
ひとは伝え（歩き）

うたうことで  
ひとは生き（死に）

ひとはうたに  
魂を注ぎ（歴史を作る）



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

☆photopos-3211 2023.6.24

わたしの道は  
わたしが歩く道

あなたの道は  
あなたが歩く道

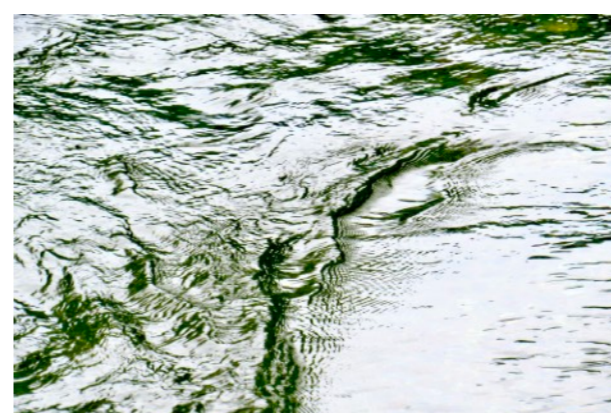
わたしの道を  
あなたが歩くことも  
あなたの道を  
わたしが歩くこともできない

けれど  
わたしは  
あなたの道を歩かなくても  
あなたの道を想像し

あなたは  
わたしの道を歩かなくても  
わたしの道を想像し

そうして  
あなたとわたしの矛盾を超えて  
ともに歩くことを  
想像することができる

道はきっとどこかで  
つながっているはずだから



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

☆photopos-3212 2023.6.25

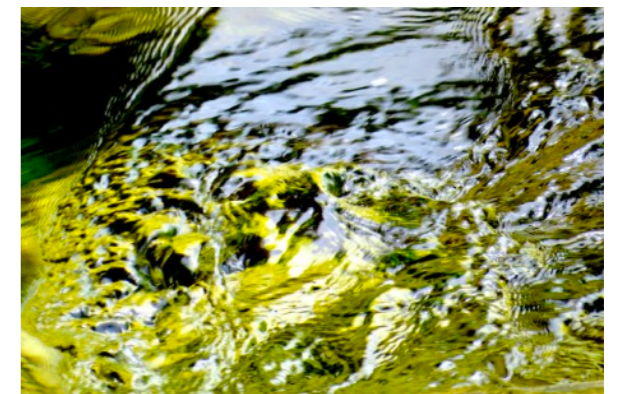
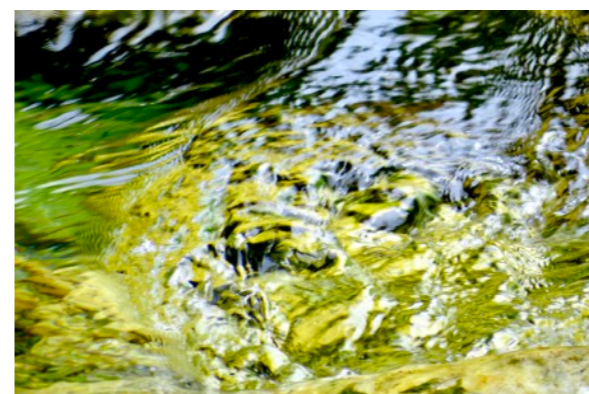
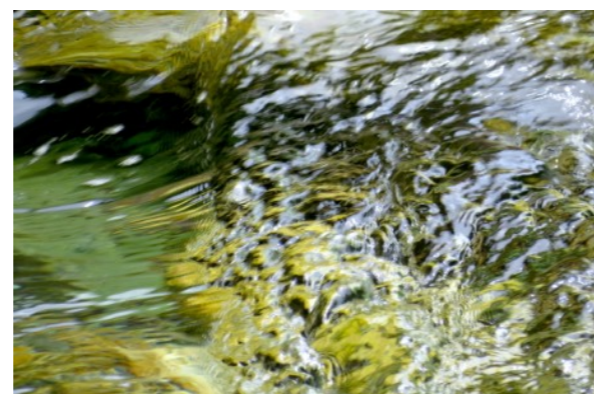
悲しいときは  
悲しい音楽を聴く

悲しみの底から  
わたしを見つめ  
癒やしてくれるからだ

そのとき  
わたしは  
ひとりではない

そこには  
悲しみをともに生き  
ともに癒やされる  
わたしたちがいる

どこにもいないはずの  
わたしたちが  
わたしとともに  
悲しい音楽を聴いている



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

存在を問うとき

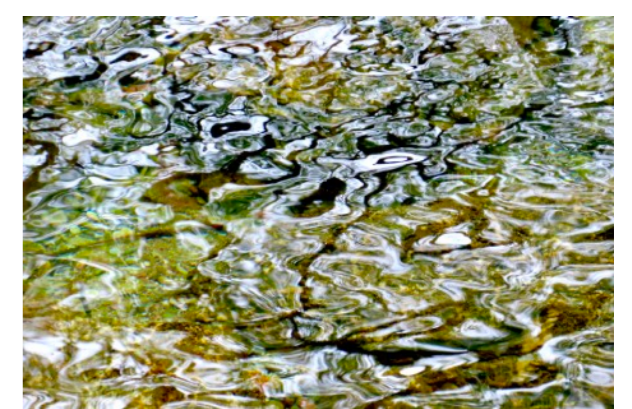
この世界に実を置くか  
この世界を虚とするか

科学は  
致死率100パーセントの世界を  
解明しようと勤しみ  
宗教（の多く）は  
死後の世界へ向けて  
あるいは生死を越えた世界のなかで  
どう生きるか  
存在するかを説く

わたしが存在している  
という神秘のまえで  
あるいは  
世界がなんらかのかたちで  
存在しているという神秘のまえで

わたしは  
どう生きればいいのか  
どう死ねばいいのか  
あるいは  
どう生死を超えればいいのか

この実と虚の  
複素的な世界のなかで



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

☆photopos-3214 2023.6.27

生きることは  
アナログ

デジタルに  
生きることはできない

涙を流すのは  
アナログ

デジタルに  
感じることはできない

直観するのは  
アナログ

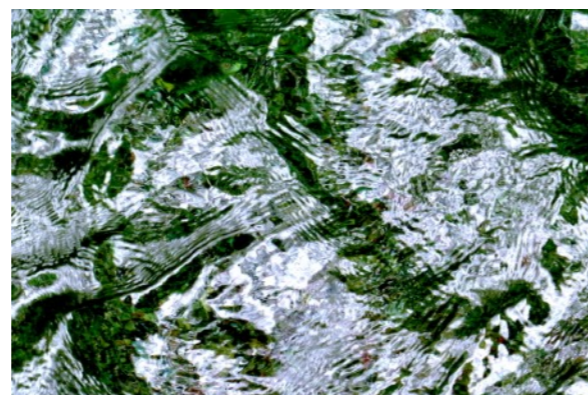
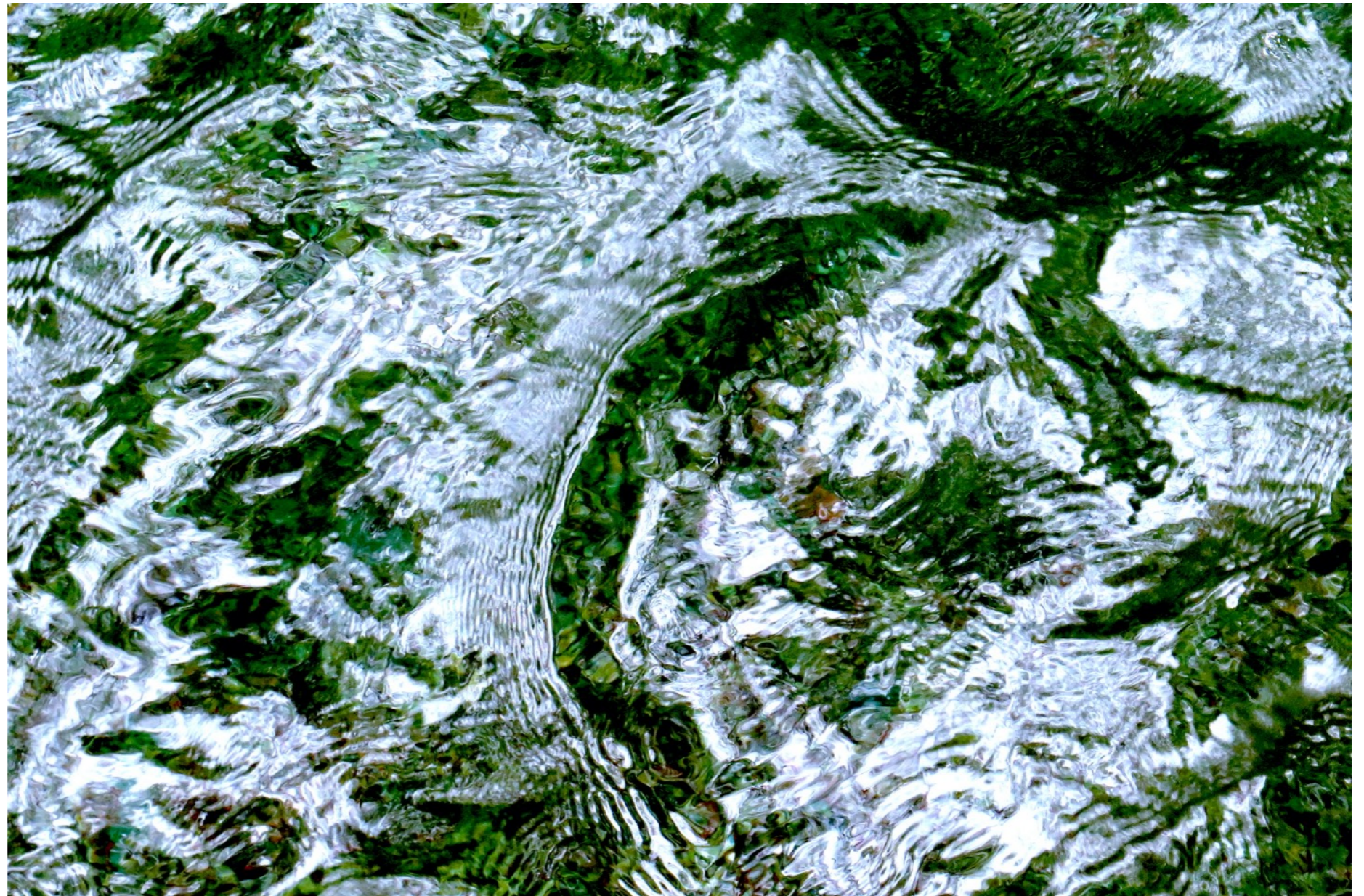
デジタルに  
考えることはできない

詠うのは  
アナログ

デジタルに  
ポエジーすることはできない

デジタルは  
使えても  
使われないようにするのがいい

使われてしまったとき  
ひとは自由をなくしてしまうから



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

死から  
目をそらす

すると  
むしろ  
死は近づいてくる  
まるで  
死に  
呑み込まれるように

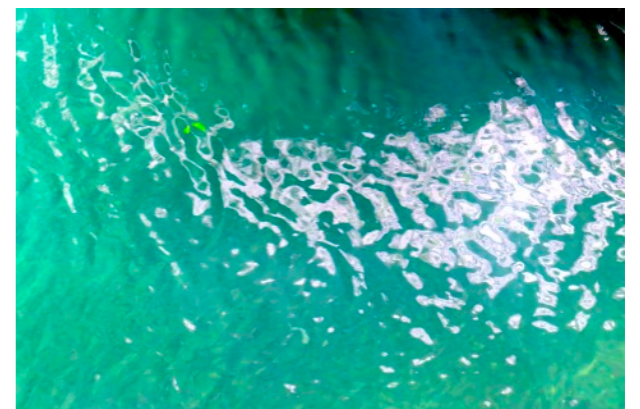
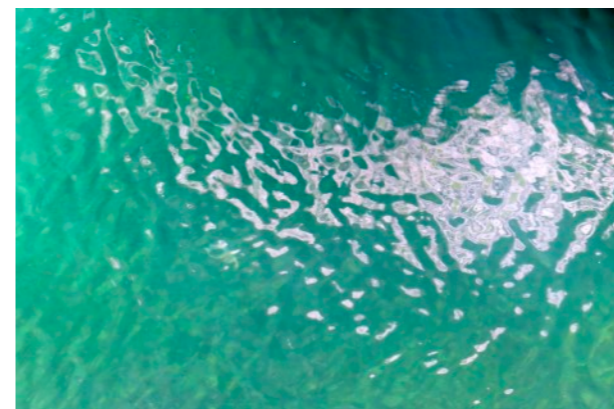
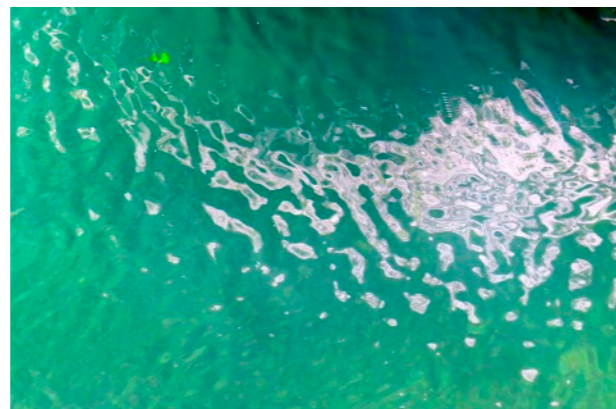
死を  
見つめる

すると  
むしろ  
死とともにありながら  
死には  
呑み込まれないで  
生きられるようになる

認められるか認められないか  
役に立つか立たないか  
生きがいがあるかないか  
そんなことよりも

生から  
目をそらさないで  
死なないでいること  
それだけでいい

死はいずれ  
だれにでもやってくる  
それまでは  
死なないで  
殺されないでいられますように



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて



☆photopos-3216 2023.6.29

悪を  
拒むのも  
免疫だが

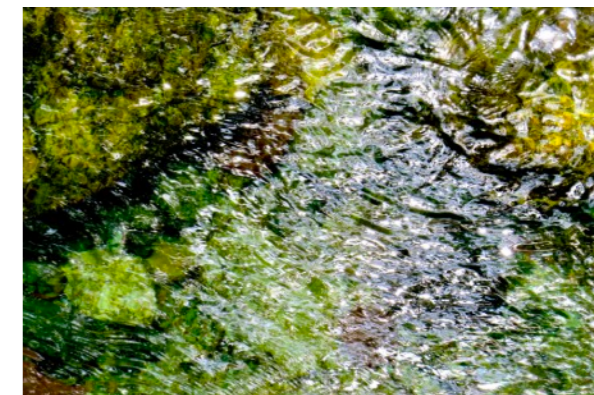
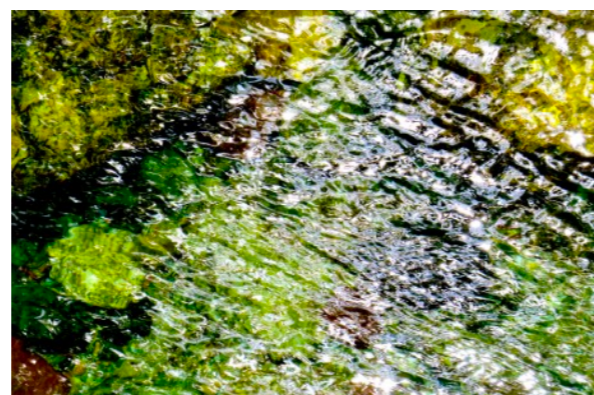
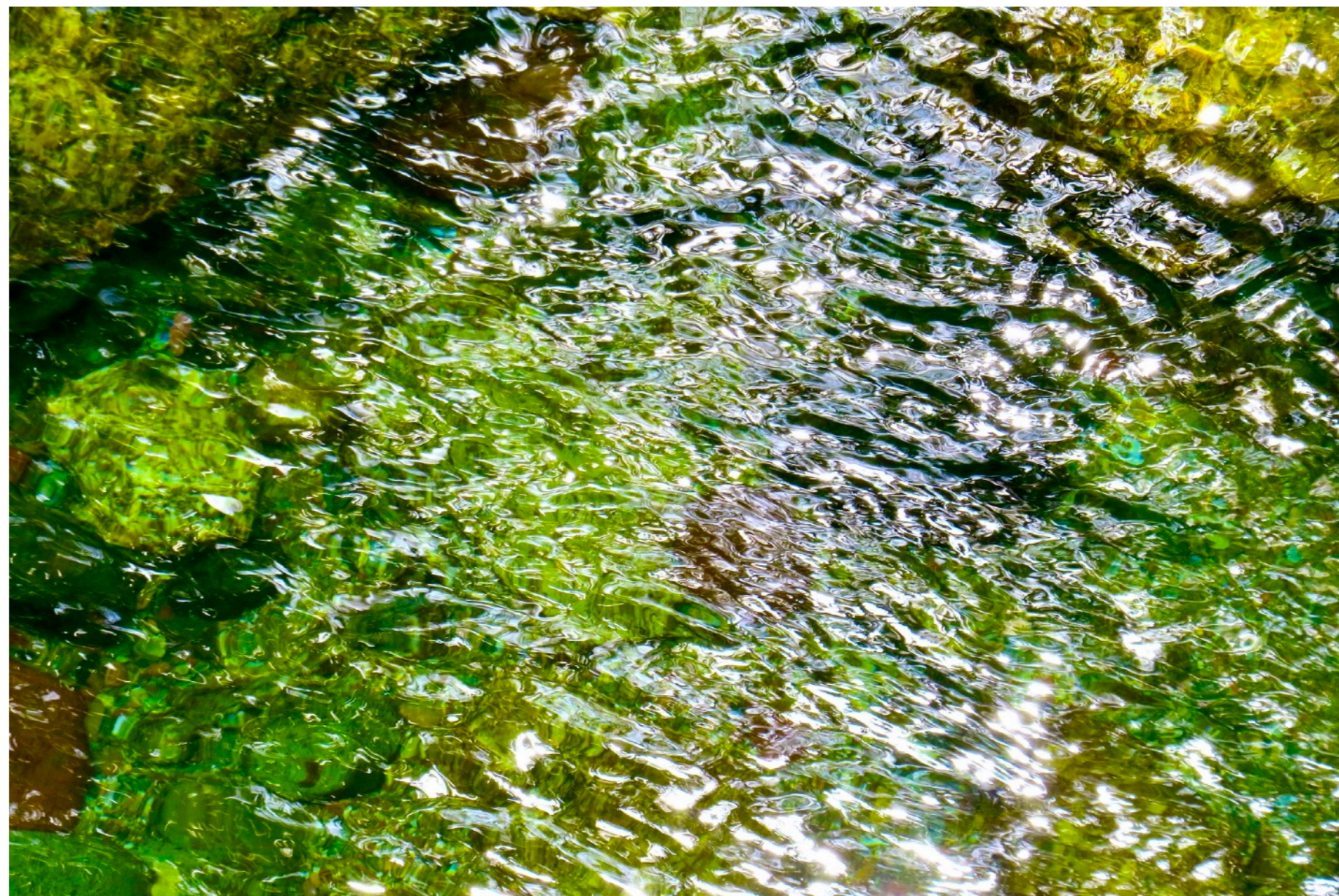
悪は  
内からも  
働いているから

わたしは  
わたしとも  
戦わなければならない

わたしは  
その不条理を  
受け入れ

わたしのなかの  
わたしでないものとさえ  
共存共生しながら

そのあいだで  
注意深く  
目をひらき  
変容していくのだ



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

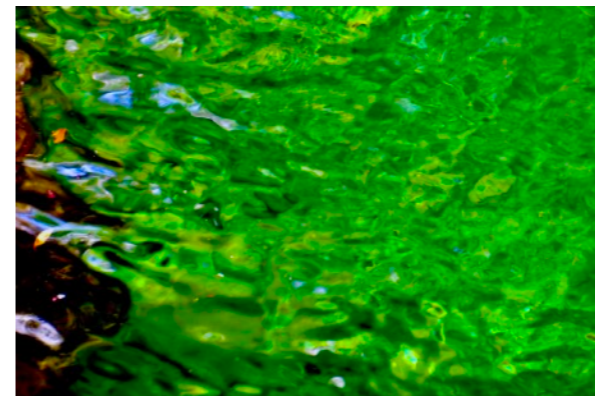
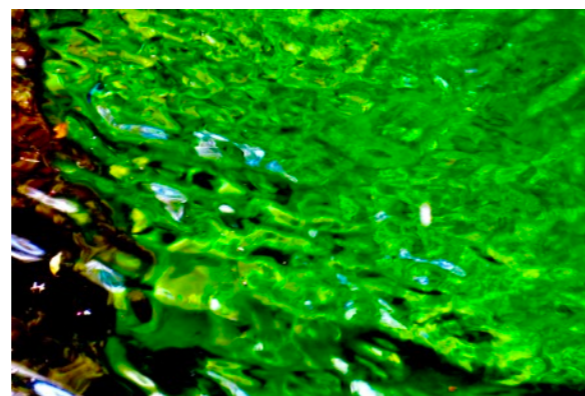
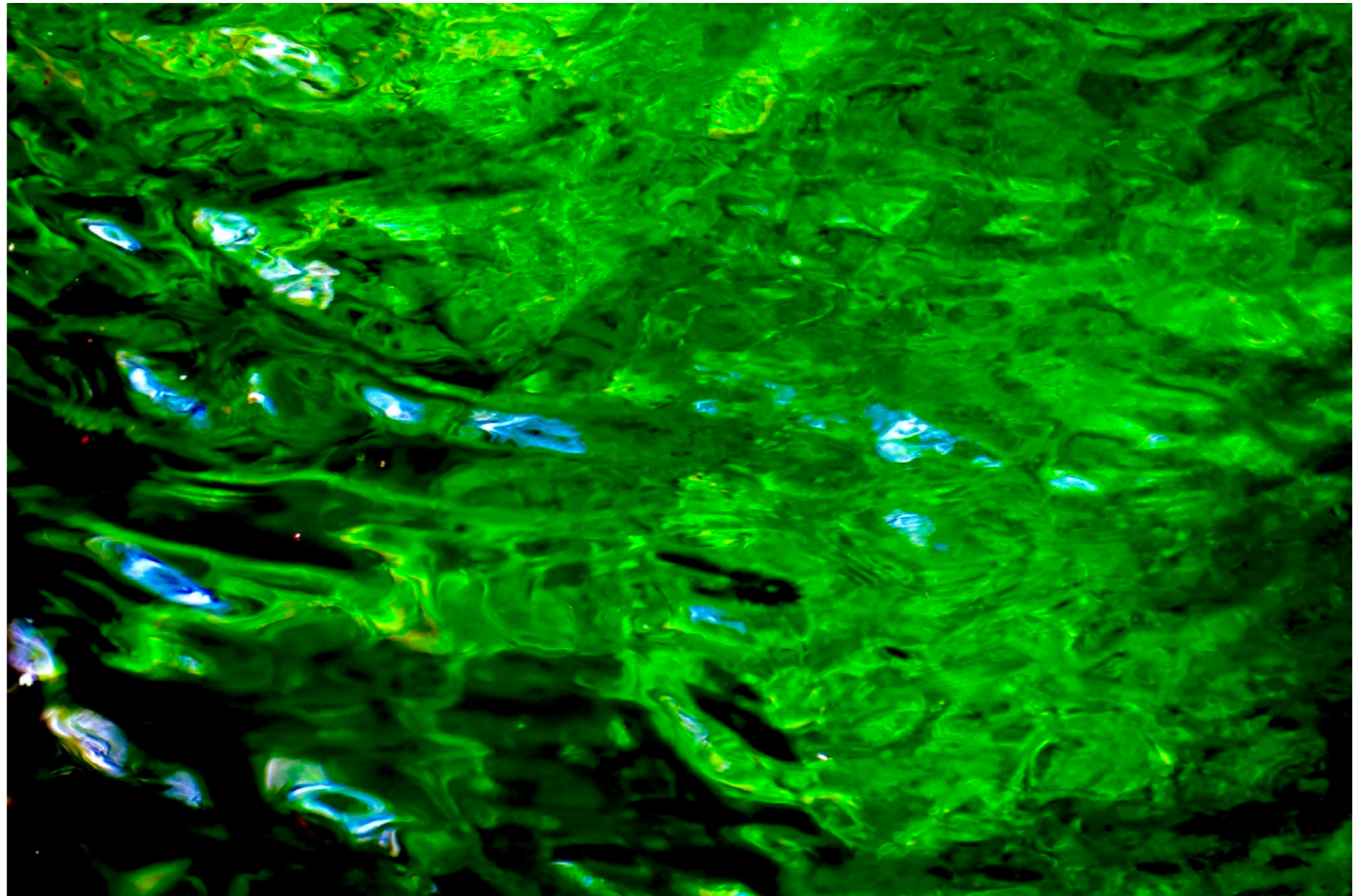
渾沌は  
分けられると  
死んでしまうように

言葉は  
定義され固定化されると  
死んでしまう

死んだ言葉で  
つくられた建物に  
詩人は  
住むことができない

悪魔は  
死んだ言葉で  
宇宙を  
つくろうとするが

宇宙は  
詩人の言葉のように  
永遠の未完性を生きている



※愛媛県久万高原町・面河溪にて

☆photopos-3218 2023.7.1

どこからか  
言の葉は  
あらわれ

いつのまにか  
言の葉は  
育ち

光を受けて  
言の葉は  
茂り

風とともに  
言の葉は  
歌い

ときに  
言の葉は  
雨にうたれ

やがて  
言の葉は  
色づき

そして  
言の葉は  
朽ち

どこへともなく  
言の葉は  
散りゆき



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

裸の王様には  
王様であるがゆえの力がある

それをもっている限り  
裸であろうが  
そうでなかろうが  
王様は王様である

子どもだけではなく  
力から自由になった大人の多くが  
裸だといいはじめたとき  
物語はそこから進んでいく

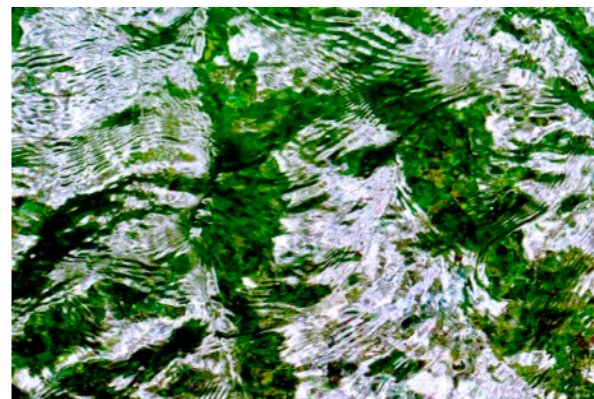
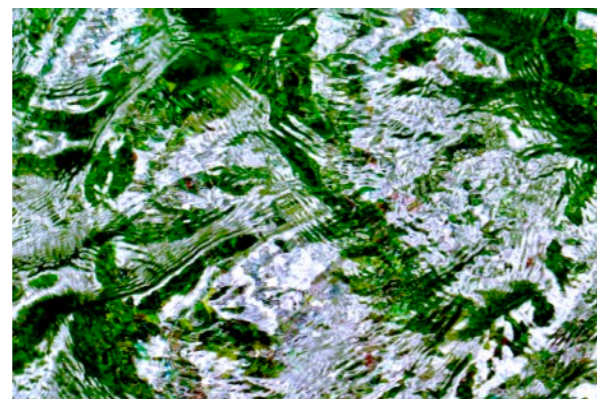
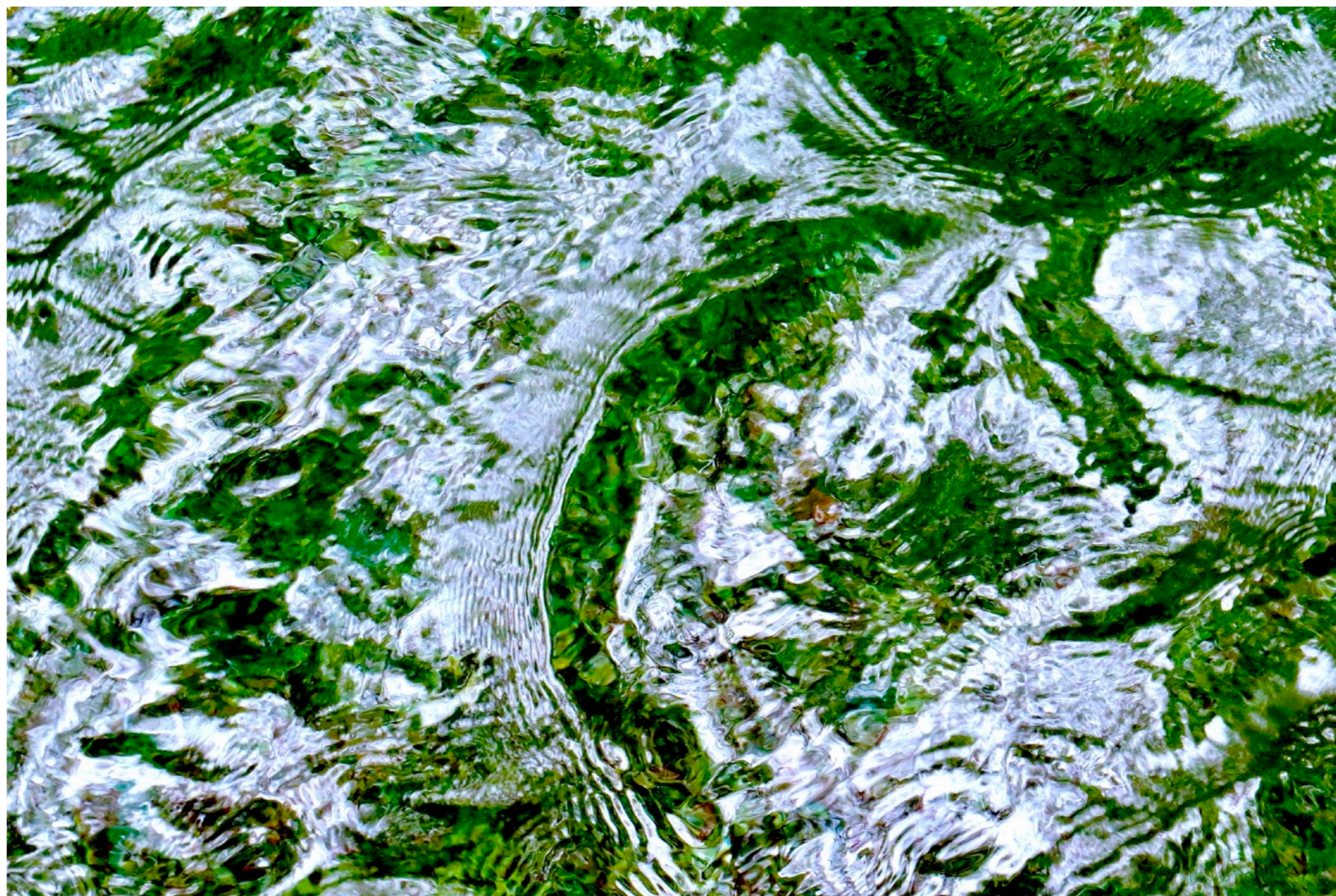
ほんとうに見えなかった  
見えていても見なかった  
あるいは  
見えていると言えなかったことがあるとき  
裸だと言えるようになると

裸の王様のその後は別としても  
なぜ見えなかったのかを  
釈明しなければならなくなる人がいて  
そういうひとがそのときどうするかだ

それを転向だとか  
後悔だとか  
回心だとか  
謝罪だとか  
そんな言葉で  
呼ぶこともあるだろうが

どちらにせよ  
そのひとはそこで試されることになる

たとうまく  
言い逃れることができたとしても  
魂はそのことを  
決して忘れないからだ



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

水底から  
水面を  
さらには  
そこから  
はるかに広がる  
空を見ている  
顔があるとせよ

その顔のように  
わたしは  
ここから  
空を  
さらには  
そこから  
はるかに広がる  
天空を見ているのだが

そのとき  
わたしはふと思うのだ  
いまわたしは  
ほんとうは  
どんな底にいるのだろうと

それを  
現実と呼ぶことも  
できはするが  
その現実とはいったい  
なんなのだろうと

ともあれ  
わたしは  
いまあるこの  
現実とされるものの  
底から  
見上げるしかできないでいる

結局のところ  
ここが  
どんな底なのか  
わからないままに



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

時間は存在しない  
あるいは  
現在しか存在しない

それでも  
ひとは時間を生きている  
生そのものが時間なのだ

今だけを見て  
生きられはしないとしても

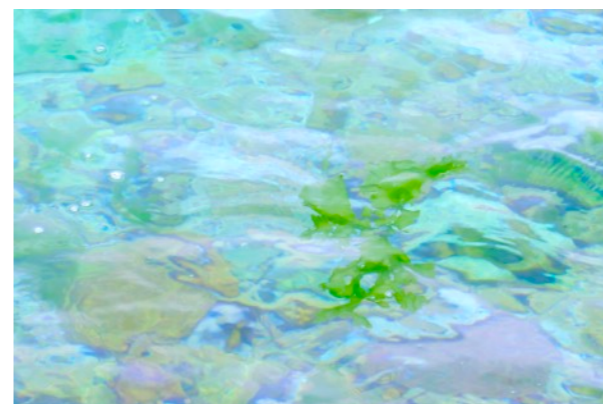
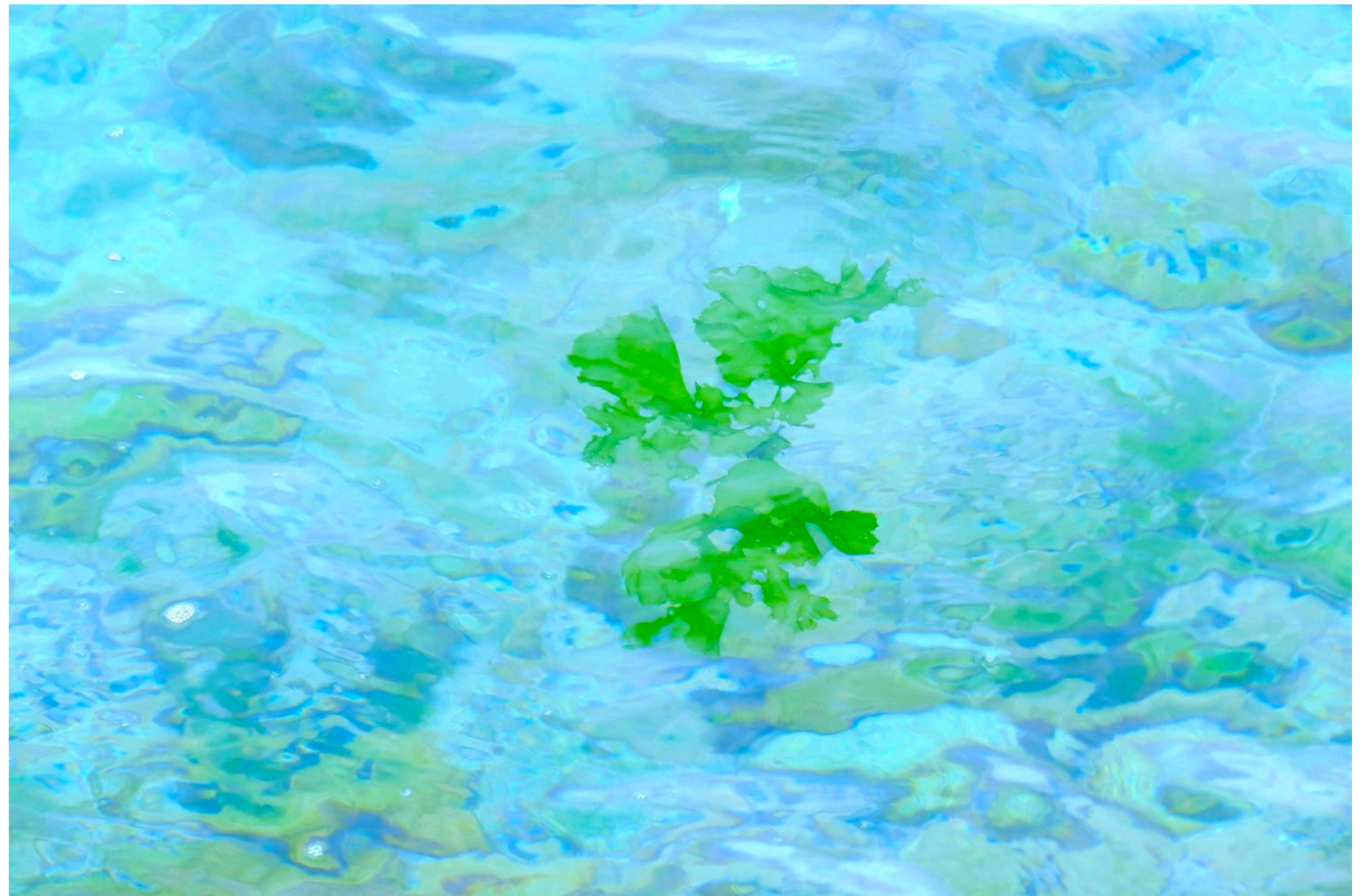
その矛盾のなかで  
持ち越し苦労からも  
取り越し苦労からも  
自由でいられればどんなにいいだろう

「明日できることは、今日するな」  
というトルコのことわざさえ  
明日への不安を思い起こさせ  
ひとを縛ったりもするからだ

原因と結果  
という物語に縛られてしまえば  
いまを生きられなくなるが

そのとき  
無門関の野狐禅の話の如く  
因果に落ちないのではなく  
因果に眩まされないでいること

昨日にも明日にも  
ましてや今にも眩まされないで  
時間を生きることだ



※愛媛県松山市北条・波妻の鼻にて

☆photopos-3222 2023.7.5

奇しきは  
ひとの世

ひとの世は  
ひとつくり  
ひとが生きる

奇しき世を  
生きんとならば

奇しき道を歩き  
奇しきときを生きることだ

奇しき道をゆけば  
奇しき跡は刻まれる

生きるとは  
奇跡とともにあること

ならば我は  
奇しき道をこそゆく



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

☆photopos-3223 2023.7.6

光のように  
言葉は訪れ  
地をあまねく照らそうとするが

光は  
閉じられた言葉の前で  
行方をなくし彷徨う

言葉が貧しくなると  
魂が飢え  
考える養分を  
得ることさえできなくなるからだ

賢く見せようと  
カタカナ語を身に纏い飾っても  
言葉はますます貧しくなるばかり

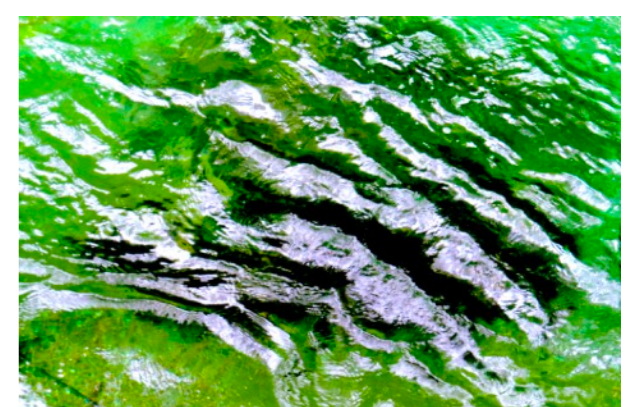
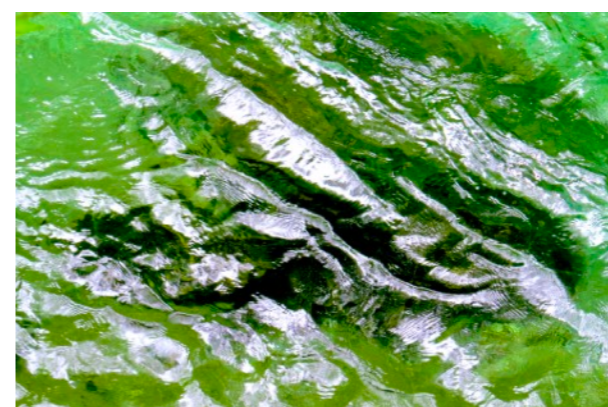
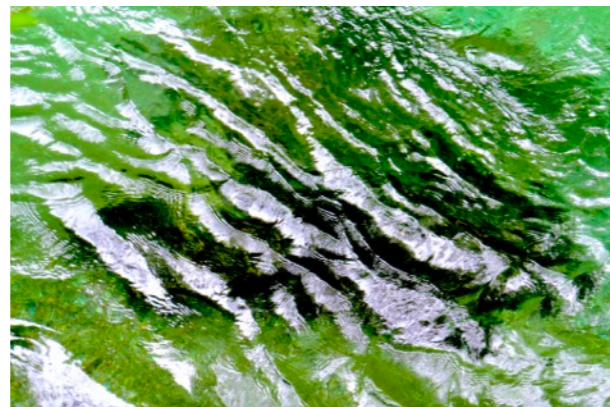
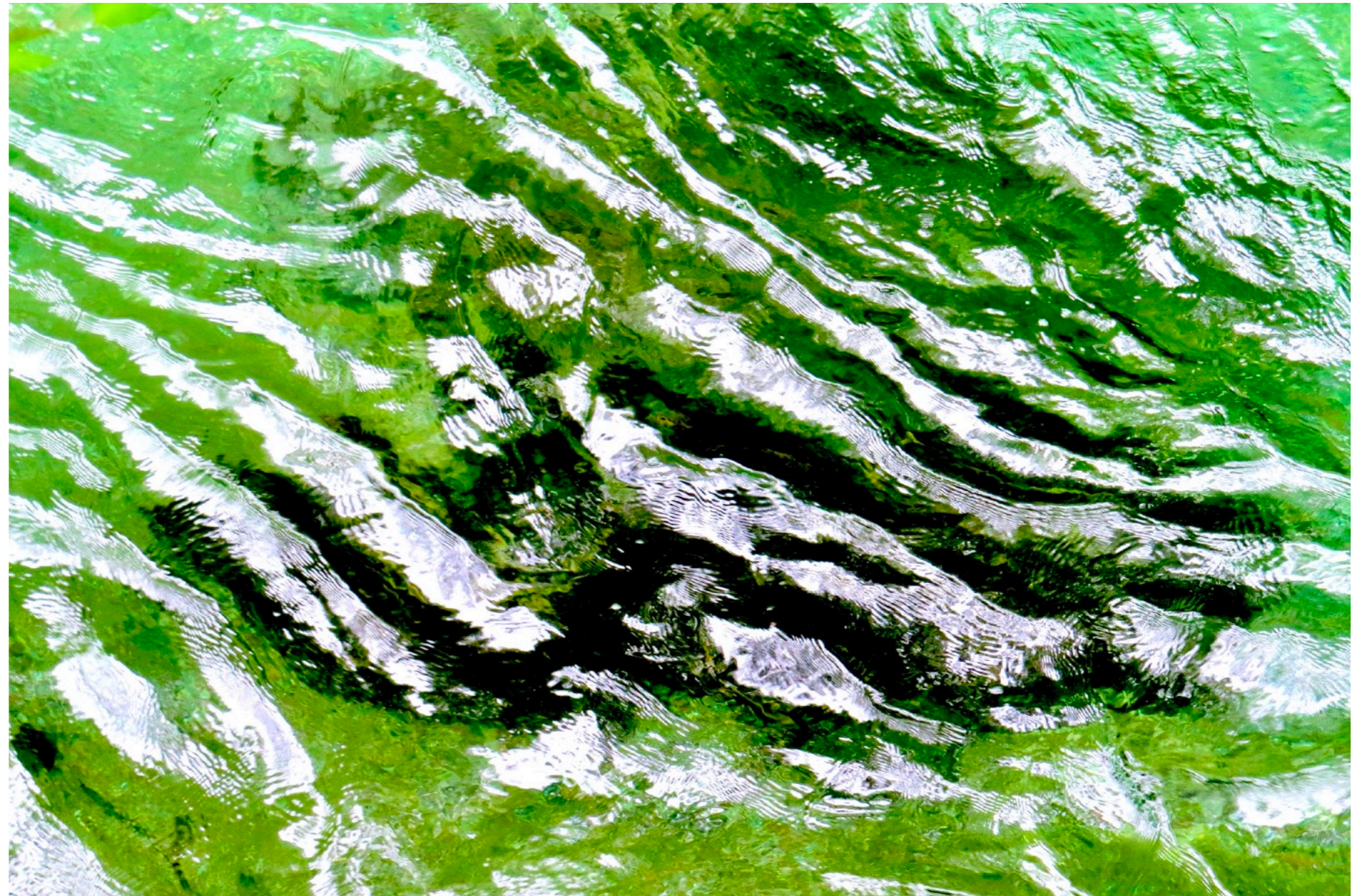
考えることを  
概念という箱に  
収めることはできない  
定義された概念はすでに死んでいる

数値化された現実には  
数を離れたときには  
意味をもたないように  
論理だけの言葉は  
論理のなかでだけしか使えない

言葉は言の葉  
芽吹き育ち繁り色づき  
やがて散り重なり  
豊かな森の養分ともなる

そして見えない光は  
地に充ちてゆく

そんな言葉が  
開かれますように



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて



喜怒哀楽  
その四つが  
どのように  
コンポジションされて  
わたしという  
感情は働いているのか

喜びのなかにも  
怒りのなかにも  
また楽しみのなかにも  
哀しみは働いているように

感情の織物は  
絶えず揺れながら  
新たな紋様を描き出し続けている

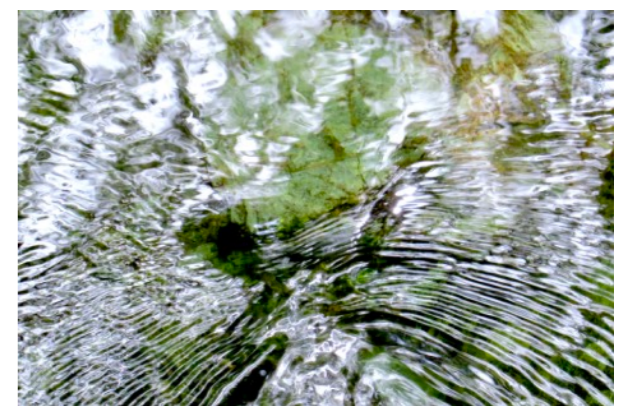
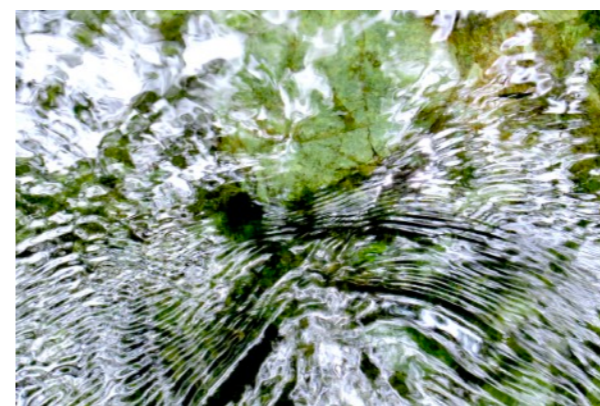
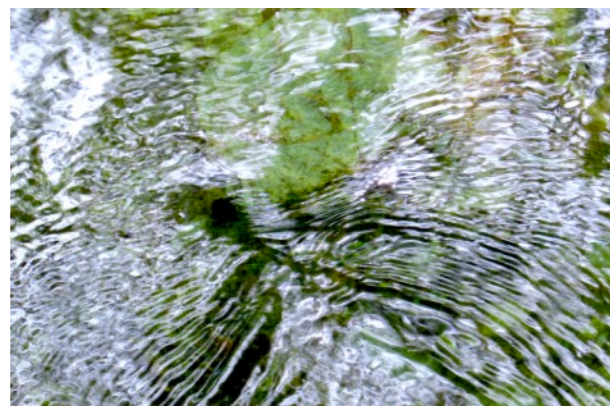
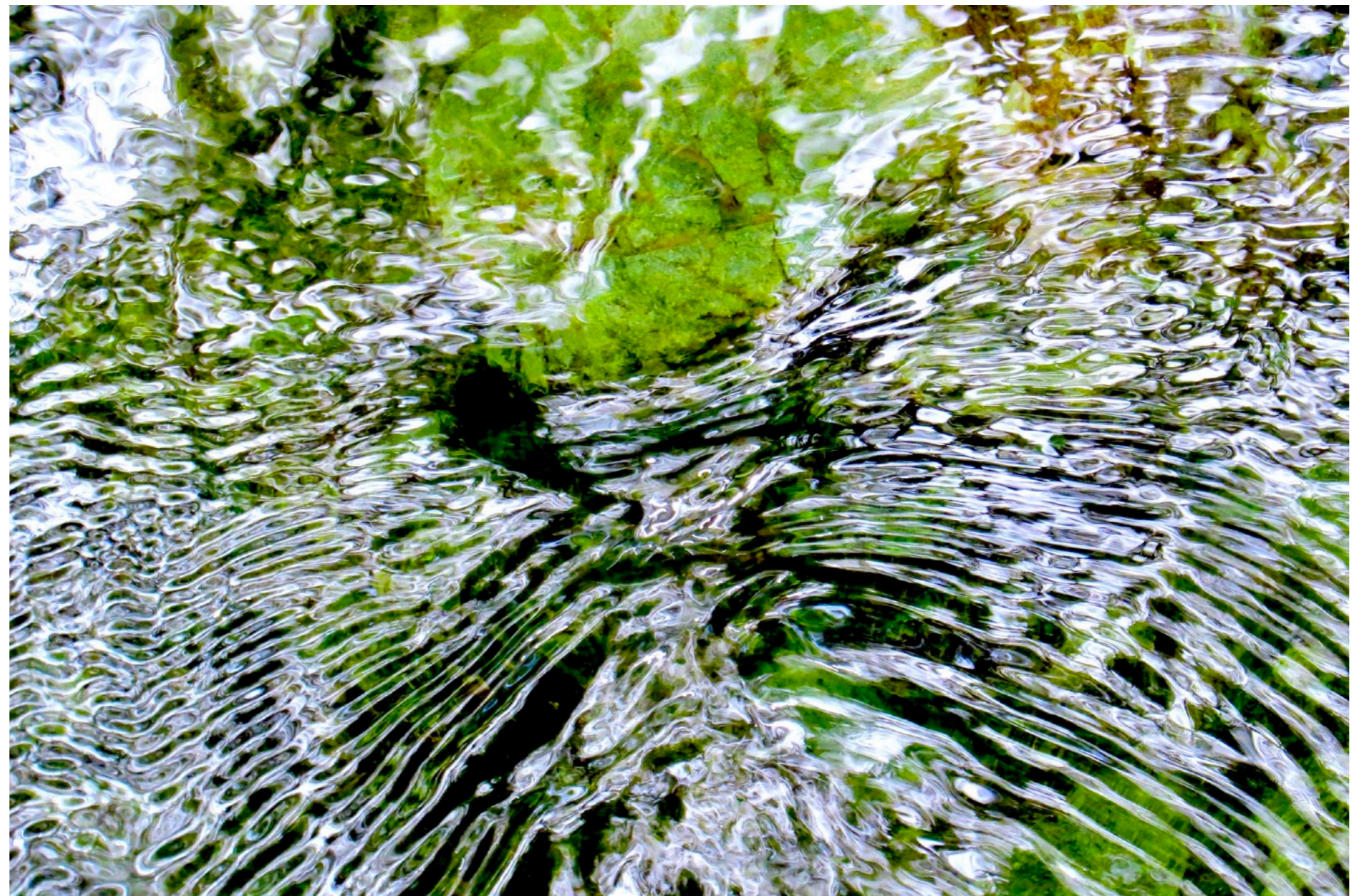
ときに美しき調べ  
ときに激しいまでの不協和音で

思考  
感情  
意志  
その三つが  
どのように  
コンポジションされて  
わたしという  
魂は働いているのか

思考だけの魂はなく  
感情だけの魂はなく  
意志だけの魂はなく

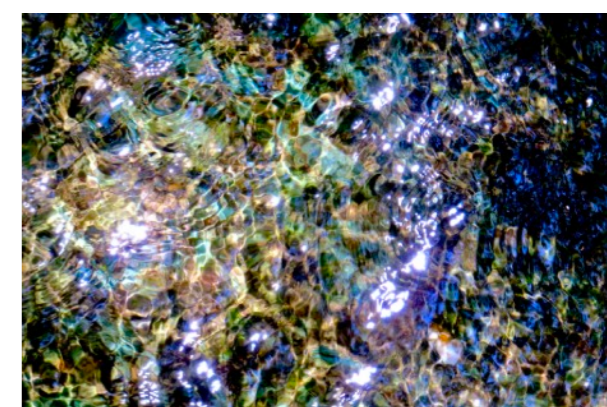
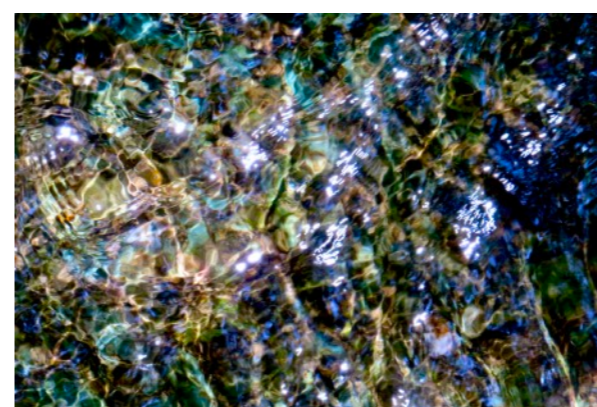
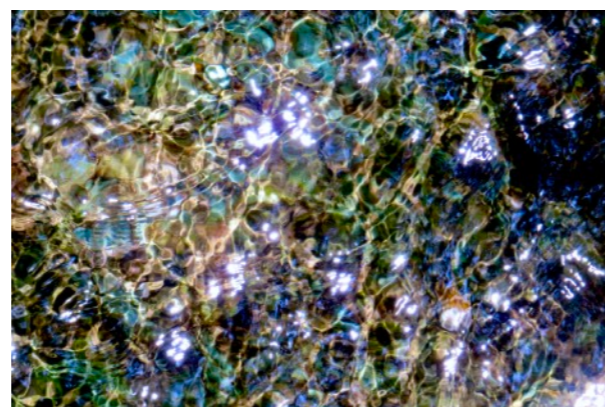
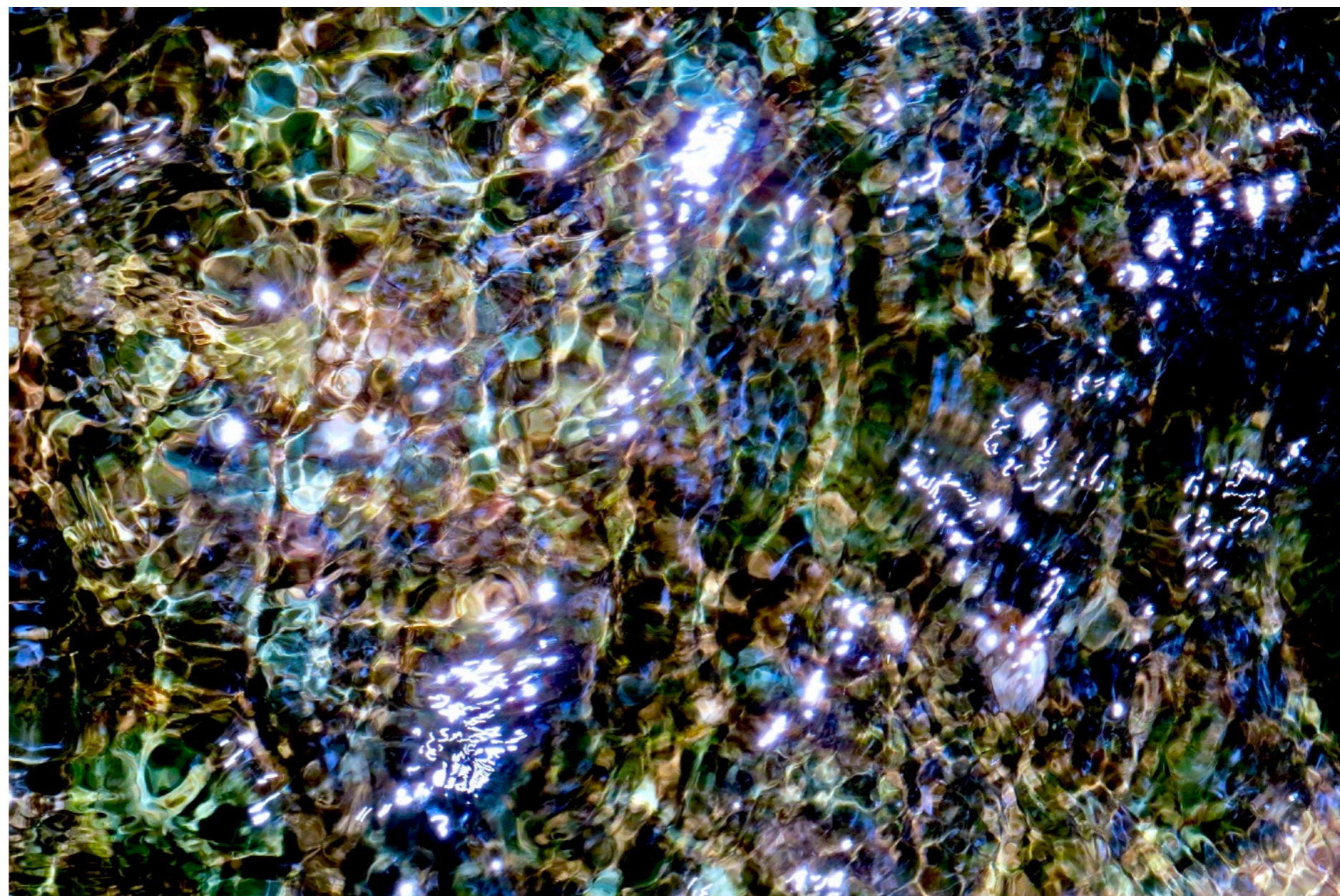
魂のアンサンブルは  
絶えず響き合い変化しながら  
新たな音色を奏で続けている

ときに光の衣を纏った姿  
ときに深い闇に包まれた姿で



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

ぼくは  
いつ  
ぼくになったのか  
  
名づけられらときか  
それまでのぼくは  
いったいだれか  
  
じぶんを  
名で  
呼んでいたぼくが  
  
いつのまにか  
ぼくと  
呼びはじめた  
  
それで  
ぼくは  
変わったか  
  
わたし  
は  
どうか  
  
おれ  
は  
どうか  
  
名が  
変わったら  
どうか  
  
おなじだけど  
おなじじゃない  
  
ぼくは  
1じゃないから  
ぼくなのだろう  
  
だからさ  
だからだ  
  
さて  
ぼくは  
だれだ



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて